

04



従来の1/20といった超小型成形機を開発し、各専門誌でも注目の株式会社新興セルビック様の製品デモンストレーションが3月28日(月)に秩父、4月20日(水)に美里で開発設計者総勢72名参加のもと、開催されました。このデモンストレーションにおいて、成形機の勉強もさることながら、株式会社新興セルビックの竹内社長様のご講演において私たちが現在学ぶべき多くの「ものづくりでの原点」となる考え方が披露されました。そこで、今回、そのエッセンスをしっかりと学ぶために竹内社長様と山岡常務執行役員(環境機器事業部)の対談が行なわれました。



株式会社 新興セルビック 竹内社長様 「常識を覆す小型成形機の開発」に学ぶ

最初に社長のご経歴をお聞かせ願いますでしょうか。私は、神奈川県で生まれ、長野県の富士見で育ちました。寒さの厳しい場所でした。金型との出会いは14歳の時、東京の叔父が金型屋の友人に勧められ、手先の器用な父親と金型屋を起こしたのがきっかけです。一家総出で、町工場密集地、大田区の蒲田に出してきました。当時から機械いじりが好きな私は、中学から帰ってきては金型のミガキ、穴あけをしました。16歳頃は、新入の工員に金型の指導もしました。1973年、27歳で、叔父と袂を分かち、父親と共に新興金型製作所を設立しました。 **それでは設計はいつ頃から始められたのですか。【一流の設計者になるには現場の経験が不可欠】** 私は当初から設計を行なっていたのですが、父からは設計ではなく、仕上げを行なうように言われました。そして、仕上

げを行なっているうちに必然的に設計能力が付きました。今、製造現場ではその仕上げといった現場経験をさせずに最初から設計だけを行なうといった風潮がありますが、これは考えものです。設計だけになってしまうと、どうしても知識を追求することしかありません。知識というのはあくまでもある事項について知っているだけであり、いくら豊富な知識があってもそれをいかに使うかといったことを考えなければ何の意味もありません。現状に照らし合わせて考えをあれこれと働かせ、実際に役に立つ知恵を生み出さなければなりません。現在の私があるのも現場で多くの経験を積ませて頂き、知恵を働かせる習慣を身に付けさせて頂いたからだと感謝しています。 **私もやはり、設計で一流になるには、実際にその物を作るとか、工程とか材料などが分か**

らないとなれないと考えます。製造工程を経験することが一流の設計者の早道ではないでしょうか。 そうですね。理屈よりも感覚だとか、感性が大切だと思います。現場の経験により、感性が育まれます。又、もう一つ、設計者に必要なことは短時間に的確な検証ができるかどうかです。頭の中でシミュレーションするのも一つの方法ですが、実際にものを作ってみるのが一番早いです。つまり、自分の手でものを作れるかがキーポイントになります。自分が作れなければ他の誰かに作ってもらう必要が出てきます。しかし、相手に自分の意志を伝えるのに非常に多くの時間と手間がかかります。自分で実際に作ることで、図面が頭の中に全部入っていれば、ラフでいい箇所とラフではいけない箇所がよく分かるわけです。手が動くというのは設計者にとってはもの

すごく有利です。現在は、コンピュータを使った設計(CAD)が当たり前前の時代になっていますが、このような環境でも設計者が製造の現場を経験することは大事なことなのではないでしょうか。【喜ばせたいという気持ちが仕事のパワー】私はもっと重要になってくると思います。CADはいとも簡単に線がひけて、それが何の疑問もなく現場に流れていってしまいます。しかし、実際は加工できる箇所と全く加工できない箇所があるのに気付かれません。このようになると、とてつもなく高価なものや不良率が高いものになってしまいます。便利になった今の時代こそ、ものづくりの現場重視を徹底的に考え、それがビジネスのチャンスになると考えています。又、もう一つ大事なことがあります。それはサービス精神が旺盛だということです。「喜ばせたい、喜んで貰いたい」という気持ちです。しかし、当初はこの気持ちが自分でも分かりませんでした。この気持ちが分かったのは20歳くらいの時です。当時は切子が手に刺さりそこに油が染み込んで、それを必死に落とそうとしていました。しかし、刺青と一緒に落とそうとすればするほど悪化しました。そして、ある時切子が刺さってじっと我慢していると、切子の周りが角質化してそこがぼろっと取れることに気がついたわけです。それから、手の汚れを気にせず、油

まみれになり、徹夜してお客さんのところに作った物を持っていった時に「良かったね」「ありがとう」と言われ、その疲れが全てすっ飛んだのです。そこで初めて自分はお客様が喜んでもらえるならいくらでもパワーがでると気が付いたのです。その喜ばれるということは、例えばいい設計をして加工の人が喜んでくれるということもあると思います。自分が行った行為に対し、他人が喜んでくれることは本当に素晴らしいことだと思います。私は今、空気や水、土で型を作り、お客様を喜ばせたいと思っています。それは環境にも優しく素晴らしいことですね。是非、実現させて欲しいと思います。又、そのようなお話を聞くと竹内社長はいつも新しい発想で常に改善する意欲に溢れている方だとなつくづく感心させられます。しかし、最近、この喜びを享受する環境が少なくなっていると感じます。これは仕事が完全に細分化し、設計する人間、作る人間、それを納める人間、営業する人間と分けられてしまっているからです。この仕事が細分化した時に、喜びを感じるようにするために社長は何か特に気を使われていることがありますか?【お客様に育ててもらった】私は社内よりも外の現場が育ててくれると考えています。社内の上司の言うことは、毎回毎回、同じような話になり、マンネリ化してしまい、なか

自分のもものになりません。しかし、お客様に叱られたり、お客様との約束は、社内での約束よりも格段上に位置付けられます。私もどちらかという父親の背中を見ていましたが、やはりお客様に育てていただいたと思います。従って、社員には出来る限り現場から外に出し、お客様と話をさせるようにしています。そうですね。現場の人を楽にしてあげるとか、新しい機械を導入して品質があがったとか、能率がよくなったとか、おそらく、このような喜びからまた頑張ろうという気持ちが出てくると思います。そのようなチャンスをどんどん作ってあげることが大切だと思います。失敗してお客様に叱られると相当、落ち込みます。しかし、失敗後の対応が重要です。通常、失敗するとごめんなさいと謝るだけで終わりにしてしまいます。やはり、自分自身がなぜ、失敗したかを追求しないとけません。徹底的に原因追求し、継続していけば失敗になりません。その通りだと思います。本日、竹内社長のお話を聞いて、改めて当社のピカ一運動の素晴らしさとその意義を再考すべきだと感じました。自分達でテーマを定め、日々継続し何でもいから1番になるこの運動をもう一度しっかりと行なっていきたいと考えています。本日はお忙しい中、多くの貴重なご意見を頂き、誠にありがとうございました。.....



05



Q.山岡常務執行役員 A.竹内社長様

株式会社新興セルビック様 プロフィール【所在地】東京都品川区旗の台3-14-5【設立】株式会社新興金型製作所の開発子会社として1987年6月10日に設立【事業内容】小型成形機および周辺装置、各種金型の開発・販売